

# 学生の学修行動に関する間接評価

白井 靖敏

## Indirect Evaluation of Students' Learning Behavior

Yasutoshi SHIRAI

### 1. 目的

大学進学率の上昇にともない、大学の数は2013年で782校（政府統計2013年12月）と増加の一途をたどっている今、多様な学生を受け入れている現状は、本学も例外ではない。大学進学率が20%前後であった1970年代とは、学生の質、学修行動に大きな差異があることは実感するところである。こうした状況を受け、学生の学修行動や学習時間、能力に関する自己評価や満足度などの学習プロセスの間接評価を行い、成績などの直接評価とリンクさせた分析を行うことにより教育の内部保証のエビデンスに利用したり、大学の教育力アップに活用したりしていく動きが広まっている。その協働組織として「大学IRコンソーシアム」などがある<sup>1)</sup>。大学IRコンソーシアムでは、米国の大学生調査NSSE (National Survey of Student Engagement) やCIRP (Cooperative Institutional Research Program) をモデルとし、会員校が共通の調査項目で実施するため、ベンチマーク可能な標準調査を提供している。その他、ベネッセ教育総合研究所の「大学生の学習・生活実態調査」や株式会社リアセック キャリア総合研究所の調査など民間企業による大学支援も活用されている。

実際のところ、こうした間接評価によらなければ、現実の学生の学修行動は把握できない。「予習・復習はほとんどしてこない」「授業では欠席や遅刻が目立つ」など、FD活動のなかで話題になるものの、これといった解決策がそうそうあるものではない。単に、課題を増やして学習を促しても継続性がなく、かえって学生の授業評価にマイナスになるケースもありえる。しっかり学生の学修行動を把握したうえで、その根本原因を見極め、大学の実態に合わせた改善を、全学的に展開していかないと、なかなか前には進めない。少数の教員が張り切っても、そう簡単に学生は受け入れられないと思われる。とは言うものの、学生の学修行動が把握できても、それを具体的な改善にどのようにリンクさせていくかが、難しいところでもある。では、本当に学生は勉強していないのか。事実、中央教育審議会大学分科会（第108回）・大学教育部会（第20回）合同会議資料<sup>2-3)</sup>でも以下のように指摘されている。

- ・日本の大学生は高校での受験勉強（暗記型）で疲弊した後に大学に入ってくる。しかも、2～3月に大学に合格すると、その疲弊を回復する間もなく、4月には入学して大学生活が始まる。大学生活の最初から、自ら学習する習慣が身につけていない。
- ・高校の受験勉強（暗記型）のみで大学への進路決定が短絡的になされてしまうことが多い。高校での進路指導も偏差値による進路決定や志望校別が、強いて言うならば機械的に

われている。

- ・日本の大学ではシラバスの作成と公表が義務化されているが、多くの場合、授業予定（工程）表としてのシラバスが学生にとって使えるような内容になっていない。学生が予習・復習できるような工程表の要件を欠いている。
- ・日本の大学で行われている大規模授業では学生が授業に出席する頻度は高くない。また、成績評価が学期末の筆記テストのみで行われることが多い。
- ・学生の学修成果（Learning Outcomes）の確認は、多方面からなされていないことが多い。

また、日本の大学生が欧米の大学生に比べて勉強していないという状況は東京大学・大学経営政策研究センター「全国大学生調査」<sup>4)</sup>（2007年、サンプル数44,905人）による大学1年生の週平均勉強時間数の比較でも示されている。資料によると、家政学系や教育学系は全体平均より、若干ではあるが勉強時間は長い。免許・資格取得に関わる学部学科が多いことによると思われるが、約60パーセントの学生は一週間に5時間も勉強していない。本学でも、2013年に総合科学研究所が調査したデータ（未公表）があるが、全国平均とほとんど差はない。

さて、学生の学修行動について、もう少し踏み込んでみると、「アルバイトのために時間が制約されている」、「課題や宿題がない」などの理由を挙げる学生があるため、本来、学生の自主的な学習を期待しても、現実的ではないと感じる。学修行動については、大学全体のIR（Institutional Research）のなかで実施していくことが推奨されていることではあるが、ここでは、K学科の女子学生を対象に予備的な調査を行ったので、これをもとに考察した結果を報告する。

## 2. 方法

東京大学・大学経営政策研究センター「全国大学生調査」<sup>4)</sup>や、2015年卒マイナビ大学生のライフスタイル調査（2014年1月：法政大学キャリアデザイン学部）<sup>5)</sup>、兵庫教育大学の「平成24年度学生生活実態調査報告」（2014年5月）<sup>6)</sup>、「女子学生のアルバイトが生活時間に及ぼす影響」（1996年：武庫川女子大紀要）など<sup>7-15)</sup>を参考に、学生の1日の生活時間など、以下の質問項目により、2014年6月に、K学科の2年生および3年生を対象に調査（無記名アンケート）を実施した。

- ・1日の平均生活時間（授業、予習・復習、自主学習、アルバイト、サークル活動など）。
- ・平日の予習・復習や自主学習などの学習時間が短い理由、学修成果に対する意識。
- ・アルバイト（1ヶ月の平均日数、平均労働時間、平均収入、勤務時間帯、職種、目的、学習との関係など）。

## 3. 結果

調査紙回収結果、98人の有効回答を得た。以下、学生の生活時間およびアルバイトに対する意識に分けて記述する。通学環境では自宅通学が81人、自宅外通学（一人暮らし）が15人、無回答2人となっており、平均通学時間でみると、自宅通学者は往復で1.9時間（最大4時間）、自宅外通学者は往復で40分と有意な差がある（T検定： $p < 0.05$ ）。しかし、友人との雑談・交

流時間を除く授業時間、予習・復習、自主学习、アルバイト、サークル・部活などの項目ではいずれも有意な差はないことから、以下の結果については、自宅通学、自宅外通学を合わせて示す。

### 3.1 学生の生活時間

まず、1日（週日と休日）についての生活時間配分（図1）を見ると、アルバイトをしている、していない、あるいは、サークル活動をしている、していないなど、バラツキは大きいが週日の平均では、授業等（実習、実験、卒論となど含む）が約5.1時間（3コマ～4コマ／1日）、全国大学生調査<sup>4)</sup>での3.6時間（2コマ～3コマ／1日）より多い。予習・復習と自主学习および読書を合わせると、約1時間となっており、土日を除く一週間あたりに換算すると約5時間、これは、全国大学生調査<sup>4)</sup>と差はなく、全国平均と並ぶ。授業選択コマ数は、多くの学生は3コマ以上（1週間5日で15コマ）と考えると、CAP制の上限ギリギリか、上回っている可能性がある。

予習・復習、自主学习では、ほとんどの学生は1時間以内、1時間を超えて勉強している学生も見られるが少ない（図2）。アルバイトとサークルでは、図2（中）、それぞれ0時間は「していない」

を表している。アルバイトは1日に2時間～5時間に多く見られるものの、6時間以上も若干名いる。

アルバイトとサークルを合わせると、3.9時間、全国大学生調査<sup>4)</sup>の2.7時間と比べるとやや多い。本調査においては、アルバイトをしている学生は98人中83人（85%）となっており、その平均は4.2時間（アルバイトをしている学生の標準偏差1.3時間、最長12時間、最短1.3時間／

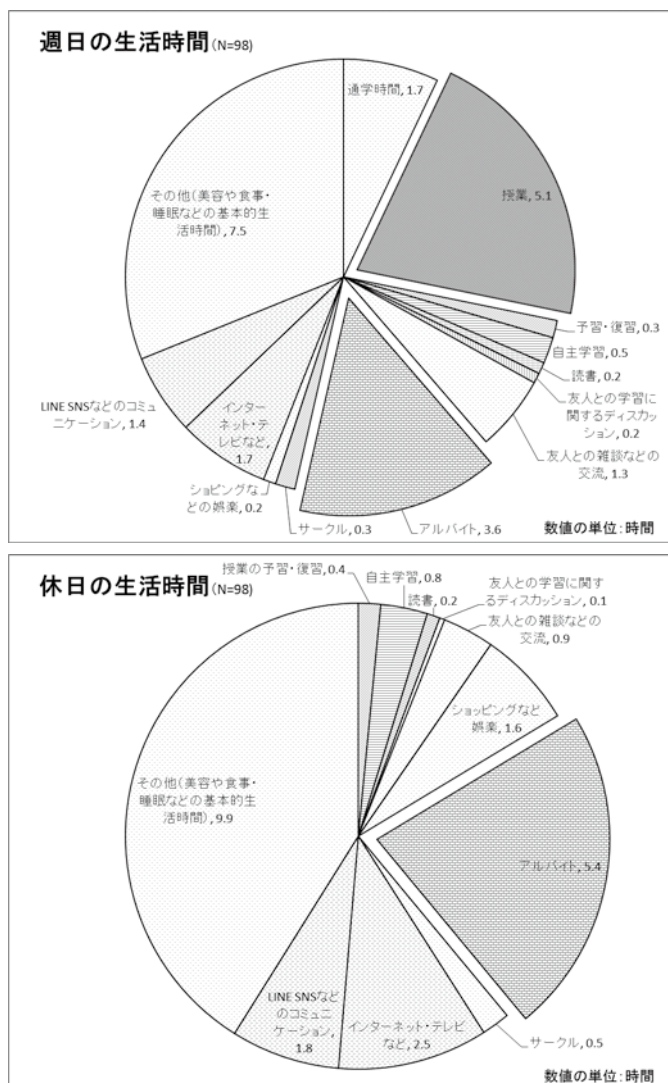


図1 学生の1日の平均生活時間、平日（上）、休日（下）

1週間の1日平均)となっている。1日12時間もアルバイトに費やしていたり、月平均15万円も稼いでいたりする学生もあり、学修と仕事、どちらがメインか分からない。この状況では、きちんと予習・復習ができていたとは考えにくい。土日などの休日でのアルバイトとは別に、何もせずぼんやりとしている時間が長い学生もある。

学生が勉強していないことは、多様化の進む今に始まったことではなく、ずいぶん昔から、そうだったと言う社会人も意外に多い(学修支援研究会6月例会<sup>16)</sup>でのディスカッション)。これで「良い」とは言えず、多様化が進む今だからこそ、大学全入時代であるからこそ、やはり、学生にはきちんとした学習習慣を身に付けさせる必要がある。

勉強していない理由について、記述欄に書かれた内容を整理すると、意欲がない、やる気がない、課題や宿題が出されていないからとしている学生が多い。調査対象学生の授業選択コマ数が、全国平均より多く、空き時間が確保できていないためではないことから、キャップ制を強化しても、これでは解決にはならないと思う。だからといって、小学生のように毎時間に予習課題や宿題を出すというのも、大

表1 勉強時間が少ない理由

意欲がない、やる気がない	15
課題や宿題がない	20
アルバイトで時間がない	11
資格のため単位さえあればよい	6
予習・復習の必要のない授業が多い	1
学習習慣がない	1
サークル	1
長時間通学	1

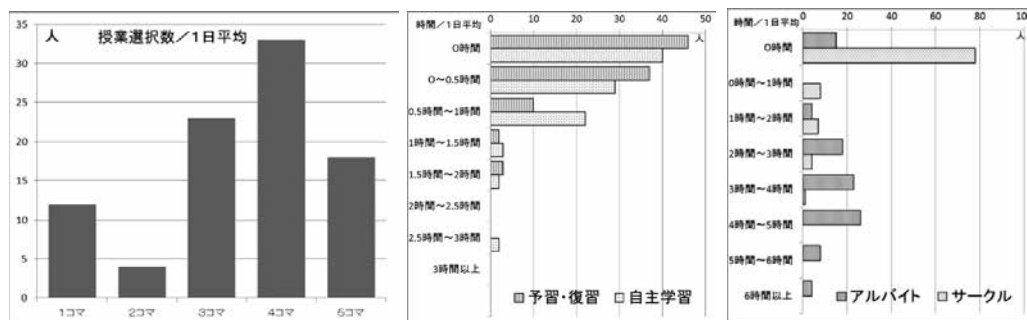


図2 1日平均の選択授業コマ数(左)、予習・復習および自主学習時間(中)、アルバイトやサークル活動の時間(右)

学生の学修指導として「いかがなものか」などの反論も、一方で聞こえる。

アルバイトは学費のため、家計を支えるためと回答した学生はきわめて少なく、多くは「娯楽費、衣服、旅行など」であることから、学修優先への意識を変え、自主的な学習習慣をいかに身に付けさせていくかが、今後の授業改善のポイントとなるように思う。自主的な学修成果を評価する仕掛け、授業への意欲・感心度など積極性なども成績に加味していくことなどが考えられる。(初等中等教育では、「感心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」という4つの観点で観点別評価を実施している。)サークル活動、ボランティア、正課外活動(資格取得、PBLなどを含む)を学修成果として明確化している大学も増えつつある<sup>17)</sup>。

友人との学修に関するディスカッションは、アクティブ・ラーニングなどの素地として重要ではあるが、現状では、きわめて少ない。バラツキは大きいものの、週日で0.2時間と、授業についての簡単な打ち合わせ程度のように感じられる。友人との雑談は1.3時間(約1時間半弱)とこれも予想より少ないと感じる。学生生活のなかで、友人と過ごすより、アルバイトなどに重きを置いて、LINEやSNSなどのネットコミュニケーションを活用している傾向があるよう

である。

インターネットやテレビなどで過ごす時間は1.7時間（最大8.3時間）、スマホなどを利用したLINEやSNSなどネットコミュニケーションに費やす時間1.4時間（最大10.2時間）、これらを合わせた情報活用では3.1時間と、授業コマ数に換算すると2コマ分にあたる。友人とFace to Faceで過ごす時間より、ネット環境が2倍を超える。スマホの普及により、以前との比較データはないが、友人などとのつながりはネット環境にシフトしているようにも思われる。

### 3.2 アルバイト

学生生活のなかでアルバイトをしている学生は85%と、他大学での調査<sup>15)</sup>と際だった差はなく、K学科の学生が特に多いわけではない。アルバイトをしていない学生は、「サークル活動や部活に時間を当てている」や、「通学時間が長い」と回答している。サークル活動に熱心な学生（1日2時間以上）は12人/98人と少ない。

筆者の学生時代と比べるとサークルや部活より、アルバイトに多くの学生がシフトし、今ではアルバイトをするのが普通かのように感じられる。アルバイトを通して得たものとして「働いてお金を稼ぐことの大変さ」「礼儀・マナーなどの勉強になった」「コミュニケーション力が付いた」「責任感が強くなった」「職業選択の参考になった」「社会人としての自覚ができた」「いい出会いがあった」「その他」

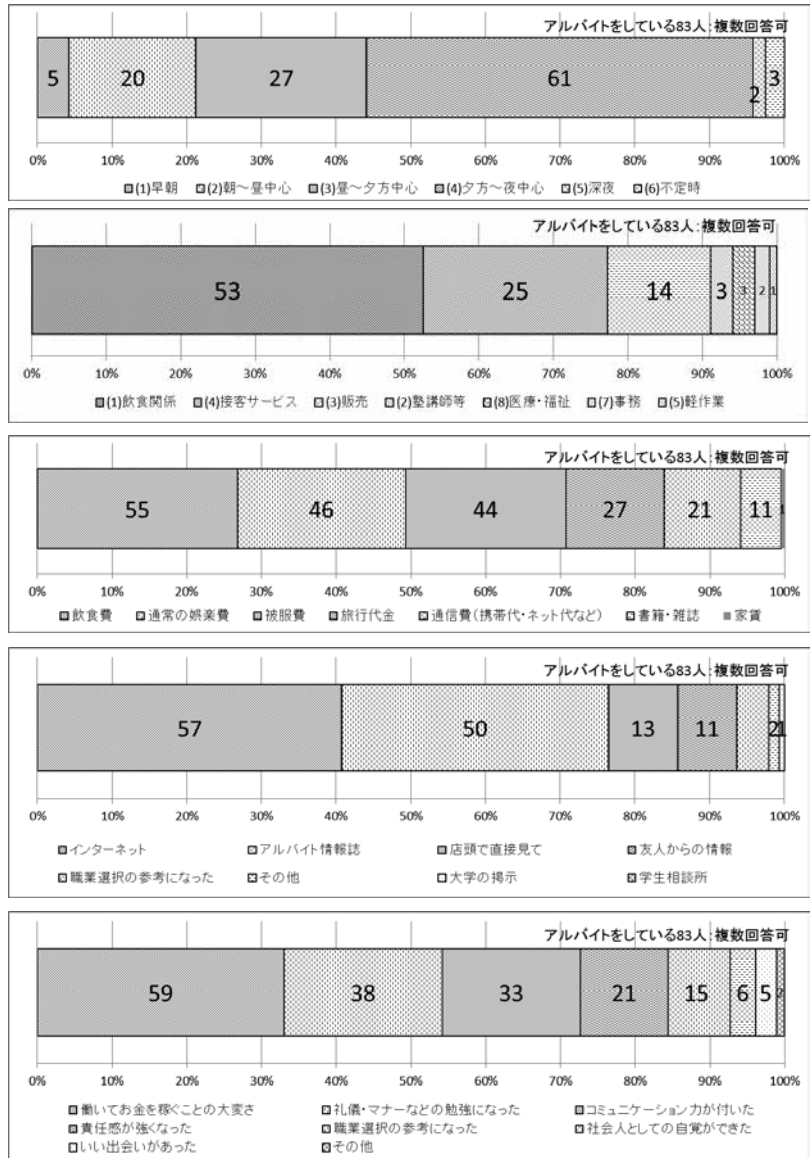


図3 アルバイトをしている学生83人について、上から順に、時間帯、職種、収入の使途、情報源、学んだこと。

た」(図3)が多いことは、ひとつの社会勉強としての意味をもつものの、学修に支障が出るほどにもなると本末転倒のように思う。

時間帯の多くは、午後から夜となっており、授業とはうまく切り分けているようであるが、中には、夕方から夜遅く、または、深夜に長時間働いて朝が辛く「遅刻」「欠席」をしてしまうと書いている学生も少なくない。

アルバイトをしている学生のみでみると、1か月あたり平均13日(最大22日)、1日あたりの平均労働時間は5時間(最大12時間)、1か月あたりの平均収入は約57000円で、最も高収入な学生は15万にも達している。用途のほとんどは学修とはあまり関係のない娯楽関連となっており、教科書などの書籍や授業料など含め家計を助けている学生は少ない。一方、約30パーセントの学生は授業の妨げになっているとしているほか、20パーセントはアルバイトのために授業を欠席または遅刻をしたことがあると答えている(図4)。

表2 アルバイトをしている83人の平均日数、平均労働時間、平均収入

	平均値	最大値	最小値
1か月あたりの平均日数	13日	22日	1日
1日あたりの平均労働時間	5時間	12時間	1時間
1か月あたりの平均収入	57339円	150000円	10000円

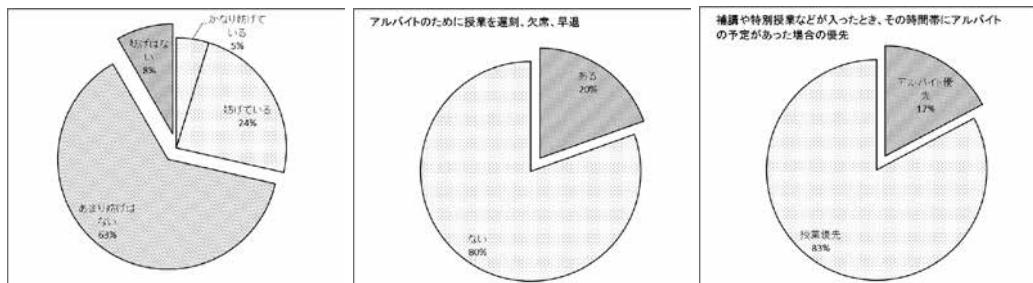


図4 アルバイトをしている83人の学生について、授業の妨げ(左)、遅刻・欠席・早退(中)、補講時の優先性

土曜日などに、補講や特別授業などが入ったとき、既にその時間帯にアルバイトの予定があった場合、授業を優先せずアルバイトをキャンセルしない学生が少なからずいる。理由として、仕事のシフトがあり、他の人に代わってもらえない、雇い主に叱られる、迷惑をかけるなどと回答している。特に、飲食業や接客業をしている学生に多い。企業側の都合により、ほとんどの業務をアルバイトに依存して経営を成り立たせている現実も見えてくる。非正規労働者やアルバイト学生が支えている現実を反映しているかのようである<sup>8)</sup>。アルバイトが将来のキャリア形成に役立っている、就職活動に有利と回答している学生が多いことはせめてもの救いではある(図5)。

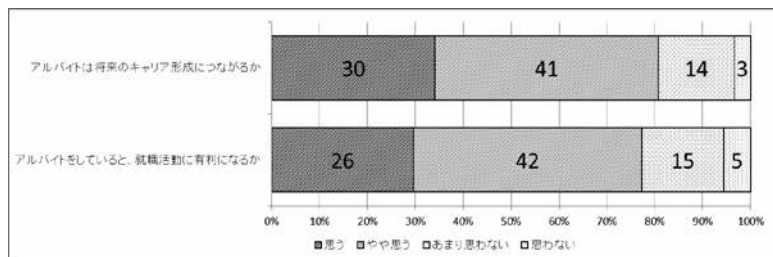


図5 アルバイトとキャリア形成、就職活動との関連

#### 4. 考察

本調査結果は、他大学や、全国的な調査において大きな差異はなく、本学に限らず、全国的にみて、学生の勉強時間がきわめて少ないことは否定できない。勉強する時間を十分確保するためのキャップ制、すなわち、一定期間(半期や1年)内で同時に申請できる授業の数を制限し、学習者の能力を超えた過剰な授業申請をしたり、選択必修の枠にある講義を保険として申請したりすることを防止する仕組みであり、K学科は、他大学や他学科に比べ、この制限がゆるいのは事実である。本調査

による「勉強していない理由」として学生が挙げている内容のなかでは、意欲がない、課題や宿題がない、アルバイトに伴う時間制約が勉強を妨げているなど、選択授業コマ数が多いからとは回答していないため、キャップ制を強化しても、あまり解決にはならない。学生の8割以上がアルバイトをしている現実も見逃せないが、そもそも、意欲がない、課題や宿題がでない勉強しようとはしない、学修に興味や関心が薄いので、余った時間をアルバイトへ向かわせているようにも感じる。アルバイトをしていないときは、娯楽、友人とのネットでのつながり、なにもしないでボーとしているなど、学修へは感心を向けていない。アルバイト時間も、学習時間も、平均より短い学生が14パーセント程度いること(図6)、また、大学生活のなかで最も重要視している項目のなかで「アルバイト」としている学生が6%程度(授業以外と回答したのは34%)いること(図7)などにも注意を払う必要がある。

大学での成績については、自由記述から、多くの学生が、できれば良い成績で

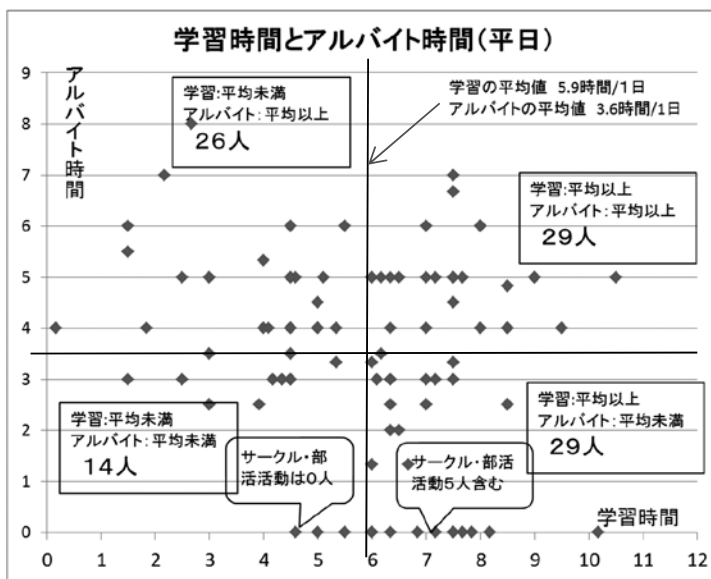


図6 平日の学習時間とアルバイト時間の関係、学習時間は授業時間と予習・復習の時間および自主学習の時間の合計値で、平均5.9時間/1日、アルバイトは平均3.6時間/1日。クロス線は、それぞれの平均値を示す。

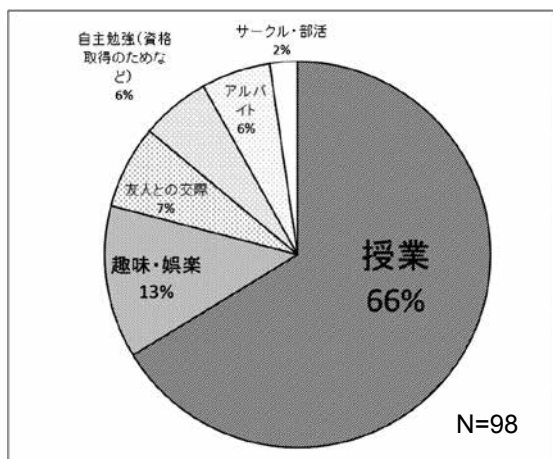


図7 学生生活における主軸

卒業したいと考えてはいるが、中には、資格が必要なので成績は関係ないとした学生も少なからずいる(表1)。ほとんど勉強せず、最低限の課題などをこなすだけで、単位さえ取得できれば、それでよいと、積極的な学修意欲は出てこないと考えられる。

アルバイトの弊害として企業側の姿勢も影響している。アルバイト依存型の飲食業や接客業に多く、シフトが変更できない、雇い主や他のアルバイト従事者に迷惑をかけるなどにより、遅刻や欠席を余儀なくさせられ、補講にも出席できないなど、学修を優先できない現実もある。アルバイトの目的が生活に迫られている状況ではなく、社会経験と回答している学生が多いことから、たしかに「礼儀やマナーの勉強」「コミュニケーション能力」「責任感」など、社会人基礎力に関わる能力の一端は身に付けられていると思われる。アルバイト収入を教科書などの学修関連にはあまり使用していないため、必要なお金を稼ぐというより、娯楽などへ向けている傾向もうかがえる。企業選択、将来のキャリア形成に役立っているものの、過度のアルバイトは、やはり問題である。社会経験としても、業種に偏りがあるので、インターンシップなどは比較にはならない。

中には、1日に長時間のアルバイトをしている学生もおり、授業への遅刻や欠席はもちろん、学修行動に負荷をかけていることから、学修行動における間接評価を、さらに踏み込んで、個々を特定し、単位取得状況や成績評価との関連付けを行い、学生生活における指導に役立てていく必要はあると考える。今回は個人を特定しない調査なので、個々の学生指導には役立てることはできないが、こうした学修行動に関する間接評価は、学部・学科として、組織的なIRとして実施していくことを考えなければならない。

さて、自主的な学習をどう促していくか。予習課題や復習のための宿題を毎時間用意するのも安易な解決策かも知れないが、自主的な学習習慣を身に付けられはしない。学問に対する興味や関心を持たせる質の高い授業設計や、学生参加型のアクティブ・ラーニングは筆者他の研究でも効果をあげているので<sup>18-21)</sup>、これらを推奨していくのも期待できる<sup>17)</sup>。成績評価の面では、特に知識・理解、技能だけではなく、興味・関心、表現、思考・判断などの面での評価を加え、可視化をしていくと同時に、学習の振り返りを自分でできるよう、学修ポートフォリオを導入していくのもひとつである。

課題や宿題がなければ自ら学習しようとし、1週間5時間未満の勉強でも授業について

#### <大学設置基準>

第二十条 教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目及び自由科目に分け、これを各年次に配当して編成するものとする。(平三文令二四・全改)

(単位)

第二十一条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一 講義及び演習については、十五時間から三十時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。

三 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、その組み合わせに応じ、前二号に規定する基準を考慮して大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。



いける実態、大学設置基準に沿った学習条件（講義90分に対して90分の事前学習、90分の事後学習）を満たさなくても単位が与えられている実態を変えていくには、単に厳しくするのではなく、成績評価規準を厳格にして可視化していくことや、ルーブリックや、カリキュラムマップなどの利用により授業の位置づけや内容を明確化していくことである程度は解決できると考える。

アルバイトは社会経験などと、学生が回答しているメリットはあるが、これを良いことに、授業を優先できないほど企業側が単なる低賃金過酷労働を強いているとすれば問題である。社会人基礎力をしっかり身に付けさせるには、アルバイトより、むしろ、大学での学修をしっかりと保障する形でのサークルへの加入推奨、ボランティア活動の奨励、それにとまなうインセンティブを与えていくのもひとつの考え方である。

大学生が勉強していない状況は、本調査に限らず、我が国全体の問題として、文部科学省は、中央教育審議会の答申を受け、様々な施策を打ち出している。日米の比較（図8）をみても、明らかに日本の学生は勉強していない。2014年4月には、「アクティブ・ラーニングの推進」「成績評価の可視化」「入試改革」を主たるテーマに教育再生加速プログラムとして予算を付け、多くの大学から具体的な、そして、他の大学へも波及効果のある取組を募集した。また、大学生が勉強しない理由として、辻 太一朗（NPO法人DSS代表）<sup>23)</sup>は、負のスパイラルとして次のようにまとめている。

- ・企業は、大学の成績はあてにならないので、GPAを、企業面接の事前選抜に使っていいない。面接では、「学生時代、特に頑張ったこと」、社会人基礎力を重視している。
- ・学生は、マジメに授業を受けていなくても、コピペレポートや出席点だけで単位が得られるため、マジメに勉強しても「得」があまりない。簡単に単位が取れる授業を選ぶ。
- ・教員は、課題を出したり、評価を厳しくしたら、「厳しい先生」などと悪評がたつ。教育に真剣に取り組むと、自分の講義を選択する学生が減るので、簡単に単位を与えるようにして、自分の研究に力を入れるほうがメリットがある。

こうしたまとめ方もあるが、私たち大学教員は、喫緊の問題として捉え、授業方法の工夫など、学生が自ら勉強するようになる方策を考え、地道に取り組んでいかないといけないと思う。

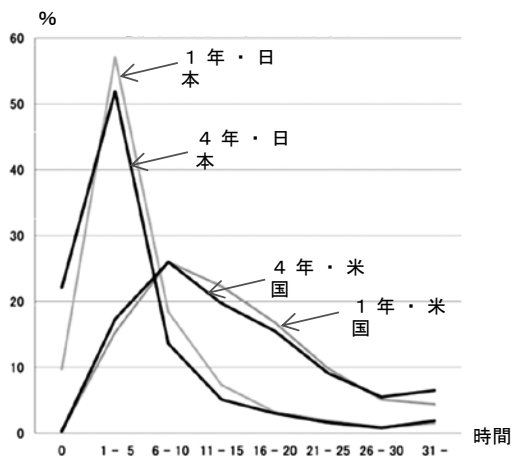


図8 データは、日本は「全国大学生調査」(東京大学 大学経営・研究センター)、米国は「National of Student Engagement」<sup>22)</sup>

## 参考文献

- 1) 大学IRコンソーシアム、<http://www.irnw.jp/>
- 2) 教育課程審議会、学士課程教育の構築に向けて（答申）、文部科学省、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)、(2008)
- 3) 中央教育審議会大学分科会（第108回）・大学教育部会（第20回）合同会議資料、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/1323904.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryu/1323904.htm)

- 4) 東京大学学生生活委員会学生生活調査室、学内広報 2007年 (第57回) 学生生活実態調査の結果、<http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou/1380/index.html>、(2008)
- 5) 株式会社 マイナビ、2015年卒 マイナビ大学生のライフスタイル調査、(2014)
- 6) 兵庫教育大学、第11回 (平成24年度) 学生生活実態調査報告書、(2013)
- 7) 吉岡朋子、風間健、女子学生のアルバイトが生活時間に及ぼす影響、武庫川女子大紀要 (人文・社会科学)、44号、p143-146、(1996)
- 8) 小池鉄夫、外食産業における学生アルバイト意識・実態調査報告、観光学研究、第6号、p75-82、(2007)
- 9) 丸山和昭、福島大学2年次学生の学修行動—平成24年度共通教育アンケートの結果から—、福島大学総合教育研究センター紀要第16号、p35-44、(2014)
- 10) 永田誠、平田孝治、川邊浩史、福元健志、菅原航平、新川彰子、入学前から卒業後までの学生の学修行動と生活態度に関する考察—教学IRの活用に向けて—、永原学園・西九州大学短期大学部紀要第44号、p10-20、(2014)
- 11) 根本知佳、佐藤岳久、安藤学、法政大学経営学部生の学習行動—統計的考察—、第36回法政大学懸賞論文、(2013)
- 12) 糠野亜紀・川西正子・平野真紀他、学生の生活リズムと学習意識に関する研究、常磐会短期大学紀要、第39巻、p.77-83、(2010)
- 13) 関口倫紀、大学生のアルバイト経験とキャリア形成、日本労働研究雑誌、NO.602、p67-85、(2010)
- 14) 京都大学高等教育研究開発推進センター公益財団法人 電通育英会、「大学生のキャリア意識調査2010」結果報告書、(2010)
- 15) 真鍋博、安永直仁、山田秀士、渡部真衣、Lee Stark、学生アルバイトの実態調査結果 (2004年版)、関西大学経済学部、(2004)
- 16) 白井靖敏、いまどきの大学生は勉強しないのか、学習支援研究会346回例会資料、(2014)
- 17) 山田礼子、生涯学び続け、主体的に考える力をはぐくむ大学へ—学生調査からみる大学生のエンゲージメント—、ラーニング・イノベーション・カンファレンス、(2012)
- 18) 梶川裕司、授業技術を考える～多人数授業の工夫～、京都FDセミナー (第1回) 資料、(2010)
- 19) 河合塾、アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか、東信堂、P3-92、(2011)
- 20) 大山牧子、田口真奈、アクティブ・ラーニング形態の授業実践におけるグループ学習の特質、大学教育学会第32回大会要旨収録、P60-61、(2010)
- 21) 白井靖敏、アクティブラーニング (グループ学習) の経験に基づく学習タイプ、名古屋女子大学紀要第57号、P117-126、(2011)
- 22) 谷村英洋、金子元久、学習時間の日米比較、IDE 現代の高等教育、No.515、(2009)
- 23) 辻太一郎、なぜ日本の大学生は世界でいちばん勉強しないのか?、東洋経済新報社、(2013)

## 要約

大学進学率の上昇にとともに、多様な学生を受け入れている今、学生の学修行動や学習時間、能力に関する自己評価や満足度などの学習プロセスの間接評価を行い、成績などの直接評価とリンクさせた分析を行うことにより教育の内部保証のエビデンスに利用したり、大学の教育力アップに活用したりしていく動きが広まっている。本研究では、しっかりと学生の学修行動を把握したうえで、その根本原因を見極めていく必要があると考え、K学科の2年生・3年生を対象に予備的な調査を行った。これをもとに考察した結果、学修行動全般に関し、全国的な調査結果との差異はほとんどなく、依然、大学生は勉強していない。アルバイトと学修との関係などから見てきた実態をみると、単に、キャップ制を強化して、大学設置基準21条に沿った改善をしても、効果が小さい。むしろ、各授業において、学生の自主的な学習を促す、きめ細かい授業改善が必要であると考えられる。